

早蕨

渋谷栄一訳

第一章 中君の物語 匂宮との結婚を前にした宇治での生活

「第一段 宇治の新春、山の阿闍梨から山草が届く」

藪だからといって分け隔てして日光は差すものでないので、春の光を御覧になるにつけても、どうしてこう生き永らえてきた月日なのだろう」と、夢のようにばかり思われなされる。

去つては迎える時節時節にしたがつて、花や鳥の色をも声をも、同じ気持ちで起き臥し見ては、ちょっとした和歌を詠むことでも、上の句と下の句とをそれぞれ付け交わして、心細いこの世の悲しさも辛さも、語り合つてきたからこそ、慰むこともあつたが、おもしろいことや、しみじみとしたことを、聞き知る人がいないままに、すべてまっくら闇で、心一つに思い悩んで、父宮がお亡くなりになつた悲しさよりも、もう少しまさつて恋しくわびしいので、どうしたらよいかと、明けるのも暮れるのも分からず茫然としていらつしやるが、世に生きている間は、定めがあることだったので、死ぬことができないのもあきれたことだ。

阿闍梨のもとから、

「新年になつてからは、いかがお過ごしでしょうか。ご祈祷は、怠りなくお勤めいたしております。今は、お一方の事を、ご無事にと祈念いたしております」

などと申し上げて、蕨、土筆を、風流な籠に入れて、「これは、童たちが献じましたお初穂です」といって、差し上げた。筆跡は、とても悪筆で、和歌は、わざとらしく放ち書きにしてあつた。

「わが君にと思つて毎年毎年の春に摘みましたので、今年も例年どおりの初蕨です。御前でお詠み申し上げてください」とある。

「第二段 中君、阿闍梨に返事を書く」

大事と思つて詠み出したのだから、とお思いになると、歌の気持ちもまことにしみじみとして、いい加減で、そうたいしてお思いでないように見える言葉を、素晴らしく好ましそつにお書き尽くしなされる方のお手紙よりも、この上なく目が止まつて、涙も自然とこぼれてくるので、返事を、お書かせになる。

「今年の春は誰にお見せしましょうか。亡きお方の形見として摘んだ峰の早蕨を」

使者に禄を与えさせなされる。

まことに盛りではなやいでいらつしやる方で、いろいろなお悲しみに、少し面瘦せしていらつしやるのが、とても上品で優美な感じがまさつて、故人にも似ていらつしやるた。お揃いでいらつしやるたときは、それぞれ素晴らしく、全然似ていらつしやるとも見えなかつたが、ふと忘れては、その人かと思われるまで似ていらつしやるのを、

「中納言殿が亡骸だけでも残つて拝見できるものであつたらと、朝夕にお慕い申し上げていらつしやるようだが、同じことなら、結ばれなされるご運命でなかつたことよ」

と、拝する女房たちは残念がつている。

あの御あたりの人が通つて来る便りに、「ご様子は常にお互いにお聞きなさつていたのであつた。いつまでもぼつととしていらつしやる、新年になつても相変わらず、悲しそうな涙顔に、なつていらつしやる」とお聞きになつても、なるほど、一時の浮ついたお心ではいらつしやるなかつたのだ」と、ますます今となつて愛情も深かつたのだと、思い知られる。

宮は、お越しになることがまことに自由に振る舞えず機会がないので、京にお移し申そう」とご決意なさつていた。

「第三段 正月下旬、薫、匂宮を訪問」

内宴など、何かと忙しい時期を過して、中納言の君が、心におさめかねていることを、また他に誰に話せようか」とお思い余って、兵部卿宮の御方に参上なさった。

しみりとした夕暮なので、宮は物思いに耽つておいでになって、端近くにいらいちゃった。箏のお琴を掻き鳴らしながら、いつものように、お気に入り入りの梅の香を賞美しておいでになる、その下枝を手折つて参上なさったが、匂いがたいそう優雅で素晴らしいのを、折柄興あることにお思いになつて、

「折る人の心に通つている花なのだろうか。表には現さないで内に匂いを含んでいる」

とおっしゃるので、

「見る人に匂いがかりをつけられる花の枝は、注意して折るべきでした。迷惑なことです」

と冗談を言い交わしなさいているが、実にも仲好いお二方である。

こまごまとしたお話になつてからは、あの山里の御事を、まずはどうしているかと、宮はお尋ね申し上げなさる。中納言も、亡くなった方のことが諦めようもなく悲しいことを、その当時から今日までの思いの断ち切れないことを、四季折々につけて、悲しいことや風流なことを、悲喜こもこもとか言うように、申し上げなされると、それ以上にあれほど色っぽく涙もろいご性癖は、人のお身の上のこととさえ、袖をしぼるほどになつて、話しがいがあるようにお答えなさいているようである。

「第四段 匂宮、薫に中君を京に迎えることを言う」

空の様子もまた、なるほど心を知つているかのように霞わたつていた。夜になつて烈しく吹き出した風の様子、まだ冬らしくてまこと寒そうで、大殿油も消え消えし、闇は梅の香を隠せず匂つているが、互いにそのままお話をやめることもなさらず、尽きないお話を心ゆくまでお話しきれないで、夜もたいそう更けてしまつた。

世にも稀な二人の仲のよさを、さあ、そうはいつても、とてもそんなばかりではなかつたでしょう」と、隠しているものがあるようにお尋ねになるのは、理不尽なご性癖のせいである。そうは言つても、物事をよくお分かりになつて、悲しい心の中を晴れるように、一方では慰めもし、また悲しみを忘れさせ、いろいろとお語らいになる、そのご様子の魅力にお引かれ申して、なるほど、心に余るほどに鬱積していたことがらを、少しずつお話し上げなされるのは、この上なく心が晴れ晴れする気がなされる。

宮も、あの方を近々お移し申そうとすることについて、ご相談申し上げなされるのを、

「まことに嬉しいことでございますね。不本意ながら、わたしの過失と存じておりました諦め切れない故人の縁者を、また他に訪ねるべき人もございませぬので、後見一般としては、どのようなことでも、お世話申し上げますべき人と存じておりますが、もし不都合なこととお思いになりましょつか」と言つて、あの「他人とお思いくださるな」と、お譲りになつたお心向けをも、少しお話し申し上げなさるが、岩瀬の森の呼子鳥めいた夜のこと、話さずにいたのであつた。心の中では、「このように慰めがたい形見にあつた」と、悔しさがだんだんと高じてゆくが、今では甲斐のないゆえに、「常にこのようにはかり思つていたら、とんでもない料簡が出て来るかもしれない。誰にとつてもつまらなく、馬鹿らしいことだらう」と思い諦める。それにしても、お移りになるにしても、ほんとうにご後見申し上げる人は、わたし以外に誰がいようか」とお思いになるので、お引越しの準備を用意おさせになる。

「第五段 中君、姉大君の服喪が明ける」

あちらでも、器量の良い若い女房や童女などを雇つて、女房たちは満足げに準備しているが、今を最後とこの伏見ならぬ宇治を荒らしてしまうのも、たいそう心細いので、お嘆きになること尽きないが、だからといって、また気負い立つて強情を張つて、閉じ籠もつていてもどうしようもなく、浅くない縁が、絶え果ててしまいそうなお住まいなのに、どういふおつもり

ですか」とばかり、お恨み申し上げなさるのも、少しは道理なので、どうしたらよいだろう、と思索なさっていた。

二月の上旬頃というので、間近になるにつれて、花の木の蕾みがふくらんでくるのもその後が気になって、峰に霞が立つのを見捨てて行くことも、自分の常住の住まいでさえない旅寝のようで、どんなに体裁悪く物笑いになつては「などと、万事に気がひけて、一人思索に暮れて過ごしていらつしやる。

御服喪も、期限があることなので、脱ぎ捨てなさるのに、襖も浅い気がする。母親は、お顔を存じ上げていないので、恋しいとも思われない。そのお代わりにも、今回の喪服の色を濃く染めようと、心にお思いになりおつしやりもしたが、やはり、そのような理由もないことなので、物足りなく悲しいことは限りがない。

中納言殿から、お車や、御前の供人や、博士などを差し向けなさった。

「早いものですね、霞の衣を作つたばかりなのに、もう花が綻ぶ季節となりました」

なるほど、色とりどりにたいそう美しくして差し上げなさった。お引越しの時のお心づけなど、仰々しくない物で、それぞれの身分に応じていろいろと考えて、とても多かつた。

「何かにつけて、忘れず気のつくご好意をありがたく、兄弟などでさえ、とてもこうまではいらつしやらないことだ」

などと、女房たちはお教え申し上げる。ぱつとしない老女房連中の考えとしては、このような点を身にしみて申し上げる。若い女房は、時々拝見し馴れているので、今を限りに縁遠くおなりになるのを、物足りなく、「どんなに恋しくお思いなされるでしょう」とお噂し合っていた。

「第六段 薫、中君が宇治を出立する前日に訪問」

「自身は、お移りになることが明日といつ日の、まだ早朝においでになつた。いつものように、客人席にお通りになるにつけても、今は、だんだん何にも馴れて、自分こそ、誰よりも先に、このように思っていたのだ」などと、生前のご様子や、おつしやつたお気持ちをお思い出しになつて、そ

れでも、よそよそしく、思いの外になどは、おあしらいなさらなかつたが、自分のほうから、妙に他人で終わることになつてしまったな」と、胸痛くお思い続けなさる。

垣間見した襖障子の穴も思い出されるので、近寄つて御覧になるが、部屋の中が閉めきつてあるので、何にもならない。

部屋の中でも、女房たちはお思い出し申し上げながら涙ぐんでいた。中の宮は、女房たち以上に、催される涙の川で、明日の引越しもお考えになれず、茫然として物思いに沈んで臥せつておいでになるので、

「幾月ものご無沙汰の間に積りましたお話も、何ということございませぬが、鬱々としておりましたので、少しでもお晴らし申し上げて、気を紛らわせたたく存じます。いつものように、きまり悪く他人行儀なさらないでください。ますます知らない世界に來た気が致します」

と申し上げなさると、

「体裁が悪いとお思い申されようとは思いませんが、それでも、気分もいつものようでなく、心も乱れ乱れて、ますますきはきしない失礼を申し上げてはと、気がひけまして」

などと、つらそうにお思いになつているが、「お気の毒です」などと、あれこれ女房が申し上げるので、中の襖障子口でお会いなさつた。

「たいそうこちらが気恥ずかしくなるほど優美で、また、今度は、一段と立派におなりになつた」と、目も驚くほどはなやかに美しく、「誰にも似ない心ばせなど、何とも、素晴らしい方だ」とばかりお見えになるのを、姫宮は、面影の離れない方の御事までお思い出し申し上げなされると、まことにしみじみとお会い申し上げなさる。

「つきないお話なども、今日は言思ひましようね」
などと言いきして、

「お移りになるはずの所の近くに、もう幾日かして移ることになっていきますので、夜中も早朝もと、親しい間柄の人が言いますように、どのような機会にも、親しくお考えくださりおつしやつていただければ、この世に生きております限りは、申し上げもし承りもして過ごしとごございますが、どのようにお考えでしょうか。人の考えはいろいろでございませぬ世の中なので、かえつて迷惑かなどと、独り決めもしかねるのです」

と申し上げなされる。」

「邸を離れまいと思つ考えは強つていけません、近くに、などとおつしやつて下さるにつけても、いろいろと思ひ乱れまして、お返事の申し上げようもなく。」

などと、言葉とぎれとぎれに言つて、ひどく心に感じ入つていらつしやる様子など、ひどくよく似ていらつしやるのを、自分から他人の妻にしてしまった「と思つと、とても悔しく思つていらつしやるが、言つても効ないので、あの夜のことは何も言わず、忘れてしまったのかと見えるまで、きれいさつぱりと振る舞つていらつしやうた。

「第七段 中君と薫、紅梅を見ながら和歌を詠み交す」

お庭前近い紅梅が、花も香もなつかしいので、鶯でさえ見過ごしがたそうに鳴いて飛び移るようなので、まして、春や昔の「と心を惑わしなされるどうしのお話に、折からしみじみと心を打つのである。風がさつと吹いて入つてくると、花の香も客人のお匂いも、橘ではないが、昔が思い出されるよすがである。所在ない気の紛らわしにも、世の嫌な慰めにも、心をとめて賞美なさつたものを」などと、胸に堪えかねるので、

「花を見る人もいなくなつてしまひまじょうに、嵐に吹き乱れる山里に、昔を思い出させる花の香が匂つて来ます」

言つともなくかすかに、とぎれとぎれに聞こえるのを、やさしそうになつと口ずさむ、

「昔賞美された梅は今も変わらぬ匂いですが、根ごと移つてしまふ邸は他人の所なのでしうか」

止まらない涙を体裁よく拭い隠して、言葉数多くもなく、

「またやはり、このように、何事もお話し申し上げたいものです」

などと、申し上げおいてお立ちになつた。

お引越しに必要な支度を、人びとにお指図おきなされる。この邸の留守番役として、あの鬚がちの宿直人などが仕えることになつていたので、この近辺の御莊園の者どもなどに、そのことをお命じになるなど、生活面の事まで定めおきなされる。

「第八段 薫、弁の尼と対面」

弁は、

「このようなお供にも、思いもかけず長生きがつらく思われますが、人も不吉に見たり思つたりするにちがいないでしうから、今は世に生きている者とも人に知られますまい」

と言つて、出家をしていたのを、しいて召し出して、まことにしみじみと御覧になる。いつものように、昔の思い出話などをおさせになつて、

「ここには、やはり、時々参りまじうが、まことに頼りなく心細いので、こつしてお残りになるのは、まことにしみじみとありがたく嬉しいことですから、最後まで言い終わらずにお泣きになる。」

「厭わしく思えば思つほど長生きをする寿命がつかなく、またどう生きよといつて、先に逝つておしまひになつたのか、と恨めしく、この世のすべてを情けなく思つておりますので、罪もどんなにか深い事でございませう」と、思つていたことをお訴え申し上げるのも、愚痴っぽい、とてもよく言い慰めなされる。

たいそう年をとつてゐるが、昔、美しかった名残の黒髪を削ぎ落としたので、額の具合、変わった感じに少し若くなつて、その方面の身としては優美である。

「思いあぐねた果てに、どうしてこのような尼姿にして差し上げなかつたのだらう。それによつて寿命が延びるようなこともあつたらうに。そうして、どんなに親密に語らい申し上げられたらうに」

などと、一方ならず思われなされると、この人までが羨ましいので、隠れている几帳を少し引いて、こまやかに語らいなされる。なるほど、すっかり悲しみに暮れている様子だが、何か言つ態度、心づかいは、並々でなく、嗜みのあつた女房の面影が残つてゐると見えた。

「先に立つ涙の川に身を投げたら、死に後れしなかつたでしうに」

と、泣き顔になつて申し上げる。

「それとても罪深いことです。彼岸に辿り着くことは、どうしてできようか。それ以外のことであつてさえも、深い悲しみの底に沈んで生きてゆく

のもつまらない。すべて、皆無常だと悟るべき世の中なのです」

などとおっしゃる。

「身を投げるといふ涙の川に沈んでも、恋しい折々を忘れることはできません。いつになったら、少しは思いが慰むことがあるつか」

と、終わりのない気がなされる。

帰る気にもなれず物思いに沈んで、日も暮れてしまったが、わけもなく外泊するのも、人が咎めることであろうかと、仕方ないので、お帰りになった。

「第九段 弁の尼、中君と語る」

お悲しみなつておっしゃっていたご様子を話して、弁は、ますます慰めがたく悲しみに暮れていた。女房たちは満足そうな様子で、衣類を縫い用意しながら、年老いた容貌も気にせず、身づくろいにつろつろしている中で、ますます質素にして、

「人びとは皆準備に忙しく繕い物をしているようですが、一人藻塩を垂れて波に暮れている尼の私です」

と訴え申し上げると、

「藻塩を垂れて波に暮れるあなたと同じです。浮いた波に涙を流しているわたしは、結婚生活に入ることも、とてもできそうにないことと思われるので、事情によつては、ここを荒れはてさせまいと思つが、そうしたらお会いすることもありません。暫くの間も、心細くお残りになるのを見てみると、ますます気が進みません。このような尼姿の人も、必ずしも引き籠もつてばかりでないものようですので、やはり世間一般の人のように考えて、時々会いに来てください」

などと、とてもやさしくお話しになる。亡き姉君がお使いになつたしかるべきご調度類などは、みなこの尼にお残しになって、

「このように、誰よりも深く悲しんでおいでなのを見ると、前世からも、特別の約束がありだつただろうかと思つるまでが、慕わしくしみじみ思われます」

とおっしゃると、ますます子供が親を慕つて泣くように、気持ちを抑えることができず涙に沈んでいた。

第一章 中君の物語 匂宮との京での結婚生活が始まる

「第一段 中君、京へ向けて宇治を出発」

すっかり掃除し、何もかも始末して、お車を何台も寄せて、ご前驅の供人は、四位五位がたいそう多かつた。ご自身でも、ひどくおいでになりたかつたが、仰々しくなつて、かえつて不都合なことになるので、ただ内密に計らつて、気がかりにお思いになる。

中納言殿からも、ご前驅の供人を、数多く差し上げなさつていた。だいたいのことは、宮からの指示があつたようだが、こまごまとした内々のお世話は、ただこの殿から、気のつかないことのお計らい申し上げなさる。日が暮れてしまふそうだと、内からも外からも、お促し申し上げるので、気ぜわしく、京はどちらの方角だろうと思つるにも、まことに頼りなく悲しいとばかり思われなさる時に、お車に同乗する大輔の君という女房が言うには、

「生きていたので嬉しい事に出会いました。身を厭いて宇治川に投げてしまいましたら」

ほほ笑んでいるのを、弁の尼の気持ちと比べて、何と違うだろうか」と、氣にくわなく御覧になる。もう一人の女房が、

「亡くなつた方を恋しく思ふ気持ちは忘れませんが、今日は何をさしおいてもまず嬉しく存じられます」

どちらも年老いた女房たちで、みな亡くなつた方に、好意をお寄せ申し上げていたようなのに、今はこのように気持ちが變つて言忌するのでも、世の中は薄情な」と思われなさると、何もおっしゃる氣になれない。

道中は、遠く険しい山道の様子を御覧になると、つらくばかり恨まれた方のお通いを、しかたのない途絶えであつた」と、少しは理解されなさつた。七日の月が明るく照り出した光が、美しく霞んでいるのを御覧になりながら、たいそう遠いので、馴れないことであつたので、つい物思いなさつて、

「考えると山から出て昇つて行く月も、この世が住みにくくて山に歸つて行くのだから」

生活が変わって、結局はどのようになるのだろうかとばかり、不安で、将来が気になるにつけても、今までの物思いは何を思っていたのだろうと、昔を取り返したい思いであるよ。

「第二段 中君、京の二条院に到着」

宵が少し過ぎてお着きになった。見たこともない様子で、光り輝くような殿造りで、三棟四棟と建ち並んだ邸内にお車を引き入れて、宮は、早くとお待ちになっていたので、お車の側に、「自身お寄りあそばしてお下ろし申し上げなさる。」

お部屋飾りなども、善美を尽くして、女房の部屋部屋まで、お心配りなさっていらしたことがはつきりと窺えて、まことに理想的である。どの程度の待遇を受けるのかとお考えになっていた「様子」が、急にこのようにお定まりになったので、「並々ならない」愛情なのだろう」と、世間の人びともどのような人かと驚いているのであった。

中納言は、三条宮邸に、今月の二十日過ぎにお移りになろうとして、最近毎日いらっしやっては御覧になっているが、この院が近い距離なので、様子も聞くとして、夜の更けるまでいらっしやったが、差し向けなさっていた御前の人々が帰参して、有様などをお話し申し上げる。

ひどくお気に召して大切にいらっしやるといふのを聞きながらに付けても、一方では嬉しく思われるが、やはり、自分の考えながら馬鹿らしく、胸がどきどきして、「取り返したいものだ」と、繰り返し独り言が出てきて、

「しなてる琵琶湖の湖に漕ぐ舟のように、まともではないが一夜会ったこともあったのに」

とけちをつけたくもなる。

「第三段 夕霧、六の君の装着を行い、結婚を思索す」

右の大殿は、六の君を宮に差し上げなさることを、今月にお決めになっ

ていたのに、このように意外な人を、婚儀より先と言わんばかりに大事にお迎えになって、寄りつかずにいらっしやるので、「たいそうご不快でおいでだ」とお聞きになるのも、お気の毒なので、お手紙は時々差し上げな

さる。御装着の儀式を、世間の評判になるほど盛大に準備なさっているのを、延期なさるのも物笑いになるにちがいないので、二十日過ぎにお着せ申し上げな

さる。同じ一族で変わりばえがしないが、この中納言を他人に譲るのが残念なので、

「婿君としようか。長年人知れず恋い慕っていた人を亡くして、何となく心細く物思いに沈んでいらっしやるというから」

などとお考えつきになって、しかるべき人を介して様子を窺わせな

すが、何としても何としても、そのようなことは気が進みません」

と、その気のない旨をお聞きになって、

「どうして、この君までが、真剣になって申し出る言葉を、気乗りしなくあしらってよいものか」

と恨みなさったが、親しいお間柄ながらも、人柄がたいそう気のおける方なので、無理にお勧め申し上げなさることができなかった。

「第四段 薫、桜の花盛りに二条院を訪ね中君と語る」

花盛りのころ、二条院の桜を御覧になると、主人のいない山荘がさうそく思いやられなさるので、「気兼ねもなく散るのではないか」などと、独り口ずさみ思い余って、宮のお側に参上なさった。

こちらにばかりおいでになって、たいそうよく住みなれていらっしやるので、「安心ことだ」と拝見するものの、例によって、どうかと思われる心が混じるのは、妙なことであるよ。けれども、本当のお気持ちは、とてもうれしく安心なことだと思ひ申し上げなさるのであった。

何やかやとお話を申し上げなさって、夕方、宮は宮中へ参内なさるうし

て、お車の設えをさせて、お供の人びとが大勢集まつて来たりなどしたので、お出になつて、対の御方へ参上なさつた。

山里の様子とは、うつて変わつて、御簾の中で奥ゆかしく暮らして、かわいらしい童女の、透影がちらつと見えた子を介して、ご挨拶申し上げなさると、お褥を差し出して、昔の事情を知っている人なのであるう、出て来てお返事を申し上げる。

「朝夕の区別もなくお訪ねできそうに存じられます近さですが、特に用事もなくてお邪魔いたすのも、かえつてなれなれしいという非難を受けようかと、遠慮しておりましたところ、世の中が変わつてしまつた気ばかりがしますよ。お庭先の梢も霞を隔てて見えますので、胸の一杯になることが多いですね」

と申し上げて、物思いに耽つていらつしやる様子、お気の毒なのを、
「おつしやるおと、生きていらしたら、何の気兼ねもなく行き来して、お互いに花の色や、鳥の声を、季節折々につけては、少し心をやって過すことができたのに」

などと、お思い出しなさるにつけて、一途に引き籠もつて生活していらした心細さよりも、ひたすら悲しく、残念なことが、いっそうつのである。

「第五段 匂宮、中君と薫に疑心を抱く」

女房たちも、

「世間一般の人のように、仰々しくお扱い申し上げなさいませぬ。この上ないご好意を、今こそ、拝見しご存知あそばしている様子を、お見せ申し上げます」

などと申し上げるが、人を介してではなく、直にお話し申し上げることは、やはり気が引けるので、ためらつていらつしやるところに、宮が、お出かけになろうとして、お暇乞いの挨拶にお渡りになつた。たいそう美しく身づくろいし化粧なさつて、見栄えのするお姿である。

中納言はこちらに来ていたのであつた、と御覧になつて、

「どうして、無愛想に遠ざけて、外にお座らせになつて居るのか。あなたに

は、あまりにどうかと思われるまでに、行き届いたお世話ぶりでしたのに、自分には愚かしいこともあろうか、と心配されますが、そうはいつでもまつたく他人行儀なもの、罰が当たろう。近い所で、昔話を語り合いなさい」

などと、申し上げなさるもの、
「そうはいつても、あまり気を許すのも、またどんなものかしら。疑わしい下心があるかもしれない」

と、言い直しなさるので、どちらの方に対しても厄介だけれども、自分の気持ちも、しみじみありがたく思われた方のお心を、今さらよそよそしくすべきことでもないの、あの方が思いもおつしやりもするように、故姉君の身代わりとお思い申して、このように分かりましたと、お表し申し上げる機会があつたら「とはお思いになるが、やはり、何やかやと、さまざまに心安からぬことを申し上げなさるので、つらく思われなさるのだつた。

